



「議会だより」100号を記念して、
2022年1月に100歳を迎えられた
元村議の大沼正彦さんにインタビュー。
村政への思いや島の思い出など、
書面でたっぷり語っていただきました。

大沼正彦(おおぬま まさひこ)さん

大正11年1月12日生まれ(100歳)。6人兄弟の次男として新島本村に生まれる。17歳で東京、20歳で鉄道士になる。その後入営して中国に出兵し、山岳戦をいくつも経験。終戦後新島に戻り、大沼家の後継者となる。それまで芋や麦だけだった新島の農業を変えようと野菜耕作に意欲的に取り組んだ先駆者。昭和34年～昭和62年まで新島村議会議員を務め、うち昭和52年～58年の間は議長を務める。現在は都内に娘さん家族と在住。

小久保…大正から令和の4つの時代を過ごされた大沼さんですが、人生の印象深い出来事などがあればお聞きください。

1 国鉄山手線の運転士を辞職して新島の後継者へ

昭和14年(1939年)
当時は新島で乳牛が相当数飼われていたので、牛の勉強をしようと新島を出てみたが、勤めた牧場での仕事は牛の勉強とは程遠い気がして、早めに辞めた。その後、勉強して運転士になったが、戦争に行くことになった。戦争から生きて新島に帰ってきた際に、敗戦後の新島の様子や家の様子を見て、敗戦と同時に皆と同じスタートに立ち、新島に残りたいという気持ちが強くなり、彦三郎の家を継ぐ決心をした。

2

ミサイル試射場設置

昭和34年(1959年)
ミサイル試射場問題で村は賛否に分かれた。

村の発展のためには港の整備が優先され、都にも国にも陳情せざるを得なかった。防衛省は試射場設置の条件として港を作り、産業振興を計るべく訴えたが、戦前戦後を体験した人たちが、多くの村民は反対したし大混乱となった。議会の傍聴者がいっぱい押しかけ、議会を開くことができないほどだった。

私は議員当時、都に港の整備は新島発展のため不可欠と訴えてきたが、当時の港湾計画課長が、「漁業の発展は港だけでは足りない。新島で必要なことは良き指導者だ！まずその指導者の育成に力を入れるべきだ！」と言われた事を今も忘れない。

3

美濃部都知事と対談し新島高校を創設

昭和45年(1970年)
当時は大島高等学校の新島分校として中学校を借用し、職員室は木造の6坪位、西風が吹く夜は隙間から埃が入り、上着を頭からかぶって、お茶を呑む始末であった。

先生に何とかならないものかと相談され、私は高校を造ろうと言ったが、先生はそれが出来ればと笑った。私はその時高校のPTA会長でもあり、自費で上京し、つてを頼って美濃部都知事と対談することができた。知事に新島分校の実情を話すと、知事は私の話を聞き領き、高校を今年中に作ろうと云った。すぐ新島に電話して高校を建てることを伝えた。

新島に帰り、役場に行き、村長に今までのことを話し

て、敷地のことを議長に話し、敷地を聞く用意をし、全てを急ぐことになった。私は学校に行き、PTAの請願書の原稿を書いてくれるように頼み、父兄の印を一人一人もらう用意をしなければならなかった。都議会議長、都知事、村長、議長、印を押すだけでも大変であった。総て自分で働かなければならないのだ。

昭和46年3月に校舎が落成したが、式典には美濃部知事も臨席してくださった。忘れることのできないことである。

小久保…今の新島村議会をどのように感じておられますか？ また新島に対する想いをお聞かせください。

今の議会は、村長に自分を誇示するための質問だけして議会として働いていないと思う。議員が産業を起すこと

を重要視しないとならない。新島で食べていけるよう農業・漁業・観光業の産業を活性化させることを期待したい。人口が減っていることも非常に心配である。若い人たちの戻れない人口構成はどうなっているのだろうか。これを変えるには何が必要かを、村も村民ももっと真剣に考えてみるべきだと思う。

新島に住んでいなくても、生まれ故郷の新島のことをいつも気にかけている。新島の事を聞けば、懐かしく、新島の話をもっと聞きたいと思う。

小久保…大沼さんが新島村で好きな場所はどこですか？

子供の頃の思い出として、新島の夏の海。綺麗な海で、海の中は遠くまで透き通って見え、時には魚の群れが手に取るように見える。波は静かで、泳ぎ疲れ

て寒くなると熱く焼けた砂の上に腹這いになって温まる。夕方になると、どこの家でも母親が浜の森の方から重箱を抱え、やかんを提げて迎えに来る。それがまた待ち遠しい。その頃になると、夕日が西の海に沈んでいくのを眺めながら、海の上から吹いてくる涼しい風を受けて重箱を開く。中

にはおにぎり、大根の葉の漬物。クサヤの干物と薩摩芋は甘さと塩の味が調和して美味かった。

小久保…戦争にも行かれた大沼さんは、今現在のロシアのウクライナ侵攻をどう思われますか？

昭和18年（1943年）1月に軍隊に入営して北支、

中支、南支と参戦して、よくも生きながらえたと考える。これからどんな世の中になっていくのか、また、もし日本が戦争に勝利していたらどうなっていたのか、また戦争とはなんだったのかと誰しも考えたことだろう。戦死した戦友は、空襲で亡くなった人たちはと考えると、戦争は起こしてはならないと肝に命じている。



大沼正彦さんと新島村の歴史

- 1922年(大正11年) 生誕
- 1939年(昭和14年) 17歳で東京
- 1942年(昭和17年) 国鉄の運転士になる
- 1943年(昭和18年) 入営(軍務に服する)
- 1946年(昭和21年) 新島に戻る
- 1959年(昭和34年) ミサイル問題

新島村議員になる

- 1962年(昭和37年) ミサイル試射場完成
- 1970年(昭和45年) 新島高校竣工
- 1971年(昭和46年) 新島高校校舎落成
- 1977年(昭和52年) 新島村議会議長就任
- 2022年(令和4年) 100歳を迎える